中国・泰山巡礼をめぐって

高橋　弘臣（愛媛大学法文学部教授）

Traveling along the Taishan pilgrimage in China

Hiroomi TAKAHASHI
Professor, Faculty of Laws and Letters, Ehime University

Taishan is one of sacred five mountains 五岳 in Shandongsheng. At first, the god of Taishan was Tongyedadi 東岳大帝 , but after the middle of the Ming period (1368-1644), more people started to believe in the goddess, Bixiayuanjun 碧霞元君 and increasingly more people embarked on pilgrimages. It is said that Bixiayuanjun helps to cure illnesses and to help women get pregnant. People went to Taishan not just to worship Tongyedadi, but also to worship Yunu 玉女 , who is believed to have been called Bixiayuanjun when the Ming period began.
During the late 15th century, Bixiayuanjun on Taishan received the protection of the Imperial court and become a place of faith. With this support, mausoleums of Bixiayuanjun were constructed all over China and such places became sacred sites for the people in the surrounding area to worship at.
During the Qing dynasty (1644-1912) attempts were made to make sure people continued to be devoted to Bixiayuanjun and so protection was given and devotion shown just like during the Ming dynasty. People making pilgrimages to Taishan increased from the latter half of the 15th century and by the end of the 16th century the annual number has reached 800,000. Most of them traveled in groups called xianghui 香会 and some of them consisted only of women. Most pilgrimages were carried out between New Year`s and April and many began their journey in the farming village in Shandongsheng , east part of Henansheng and north part of Hebeisheng.
After pilgrims reported their departure to their local Bixiayuanjun, they would put a small shrine containing a statue of Bixiayuanjun on their back, would stop to pray at shrines containing Bixiayuanjun along the way and proceed to Taishan. They would stay the night at an inn at the foot of Taishan, and after they had paid a duty 香税 , they would leave the inn in the early dawn to climb the mountain. When they reached the summit, they would worship Bixiayuanjun. Those who had wished to have a child and were able to have one presented a doll of a child, and those who were cured of an eye problem presented a pattern of an eye.
When the pilgrims reached the bottom of the mountain they would have a banquet at the inn, and when they reached their home village they would report their safe return to Bixiayuanjun. As subjects of further study I would like to clarify the conditions when Bixiayuanjun appeared and compare the pilgrimage to Taishan and the Shikoku henro.

はじめに

泰山（太山・岱山とも記す）は中国・山東省に存在する。標高は1545㍍で、峨々たる山容を誇り、山岳信仰において注目されてきた。中国のいわゆる五岳（東岳泰山・南岳衡山（湖南省）・中岳嵩山（河南省）・西岳華山（陝西省）・北岳恒山（河北省））の一つであり、五岳の中で最も名高いと云っても過言ではない。泰山の主神は当初東岳大帝（泰山府君）であったが、明代（1368～1644）以降になると碧霞元君という女性神が信仰を集め、華北を中心に多くの巡礼者が参拝に訪れるようになった。なお当時巡礼は進香、巡礼者は香客等と称された。

泰山巡礼（碧霞元君に対する巡礼）は清代（1616～1911）に入っても行われ、アヘン戦争（1840～42）

以後の動乱（太平天国の乱・義和団事変・中華民国の成立・軍閥の内戦・抗日戦争・国共内戦等）によって一時的に衰退し、中断することもあった。また中華人民共和国成立後も文化大革命によって中断されたが、文革終結後復活し、現在に至るも盛んに行われており、遠路台湾から巡礼に訪れる者もいるという。碧霞元君は子授け・眼病治癒に功徳があるとされ、巡礼者には女性が多い。泰山巡礼は華北を代表する巡礼であり、普陀山（浙江省）・武当山（湖北省）巡礼や福建の媽祖、杭州の観音に対する巡礼と並び称されている。今回の報告では先行研究を整理しつつ、特に明清時代の泰山巡礼を通観するとともに、今後の課題についても考察を試みたい。

一　泰山信仰の概観

中国の歴代皇帝は泰山において、天地を祀る儀式である封禅を行った。封禅は秦の始皇帝、前漢の武帝、後漢の光武帝、唐の高宗・玄宗、北宋の真宗が行った。封（天を祀る）は泰山頂上の登封壇及び山麓の封祭壇、禅（地を祀る）は社首の降禅壇において行われた。封禅の当初の目的は皇帝の不老長寿を祈る点にあったが、やがて皇帝が封禅を通じて王朝の完成を天と地に告げ、天下太平・国家安泰を祈願するようになった。

泰山には多数の神々が宿るとされるが、主神は当初東岳大帝であった。東岳大帝は、唐代（618 ～ 907）には天斉王、北宋時代（960 ～ 1127）には天斉仁聖王・天斉仁聖帝、元代（1271 ～ 1368）には天斉大生仁聖帝に封じられ、皇帝と天地とを仲介する役割を果たす神であった。また泰山は五岳の中で最も東に位置することから、万物が始まる、全ての生命の生まれ出づる場所とされ、さらに後漢の頃には死者の魂が帰り着く場所でもあると考えられていた。その結果、東岳大帝は生死をつかさどる神、人間の寿命を決定する神となり、人々は東岳大帝に長寿を祈願するようになった[(1)]。宋・元代には、民衆は長寿を祈願するため団体（香会・香社等）を組織し、泰山へ巡礼に赴いた。また宋代以降になると、華北を中心として各地に東岳大帝廟が建てられ、そこにも参拝に訪れた[(2)]。

ところが明代に入ると、泰山では東岳大帝よりも碧霞元君という女性神が信仰を集めるようになった。碧霞とは夜明けを告げる紺碧の雲、元君は道教の女性神であり、子授け・眼病治癒に功徳があるとされていた。碧霞元君は当初東岳大帝の廟に合祀されていたが、信仰の高まりに伴い、独自の廟が泰山はもとより、華北を中心として全国に設けられた。こうした廟は碧霞元君廟・娘娘廟・碧霞元君行宮・碧霞宮等と呼ばれた。なお碧霞元君は、民間では泰山娘娘・泰山奶奶という通（俗）称で呼ばれた。また眼光娘娘（眼光奶奶）・送子娘娘（子孫奶奶）という女性神が通常合祀されている。明代以降、民衆は東岳大帝に代わり、碧霞元君に参拝するため、大挙して泰山へ巡礼に訪れるようになった。そこで碧霞元君に対する信仰や巡礼について、以下に見ていきたい。

二　碧霞元君信仰

1　碧霞元君の登場

碧霞元君という女性神はどのように登場し、信仰されるようになったのであろうか[(3)]。泰山には東岳大帝とは別に、玉女（仙女）に対する信仰があった。北宋の大中祥符元年（1008）、皇帝（真宗）が泰山で封禅を行おうとした際、先遣隊が頂上の池（玉女池）の傍らで玉女の石像を発見した。それを真宗が碧霞元君に封じ、その後碧霞元君に対する信仰が民間に広まった、というのが碧霞元君信仰の起源に関する従来の通説である。しかし真宗が玉女を封じて碧霞元君と称し、その信仰が広まっていたと述べているのは実は明末の史料であり、北宋時代の史料にそのような記述はなく、碧霞元君に対する信仰と、真宗による封禅の故事が、明末にこじつけられたことが近年の研究で明らかにされている[(4)]。北宋時代の史料には、真宗が玉女の石像をつくりなおし、祠（廟）をつくって奉納したことが記されているだけである。即ち李濤『続資治通鑑長編』巻70、大中祥符元年（1008）9月庚申・辛酉条には次のように見えている。

> 〔庚申〕泰山の玉女池は太平頂にあり、その水源は塞がり濁っていたが、封禅の儀式を準備するための設営を行ったところ、泉がたちまち湧き出し、〔工事に携わる〕役夫が山を登っていくと、その水の流れは自然に広がり、澄み切って鏡のようであり、水の味は甚だ甘美であった。〔先遣隊の〕王欽若が池を浚い、一帯を整備することを請うた。池（玉女池）のかたわらに〔玉女の〕石像があり、破損していたので、〔真宗は〕皇城使劉承珪に詔して玉石を以て新たにつくりなおさせた。出来上がると真宗は臣

下とともにそれをご覧になった。辛酉、使者を遣わし、石を削って龕（厨子）をつくらせ、もとの場所に置き、王欽若に〔玉女を〕祀らせた。

この後、北宋の元祐年間（1086～94）、金代（1115～1234）に地方官・皇族が詔を奉じて玉女の廟に参拝している事例があり、当時玉女に対する一定の信仰のあったことは事実である。また元朝は廟を改築し、昭真観と称するようになり、さらに元代末期には玉女が東岳大帝の娘であると記す史料も現れている。しかし当時泰山信仰といえば東岳大帝に対する信仰であり、全国各地に東岳大帝廟が建てられたが、そこで祀られているのも東岳大帝であり、碧霞元君は合祀もされていない。

明代初期に至っても、玉女はまだ碧霞元君とは称されておらず、東岳大帝と同列に語られるほどの重要性を有していた形跡も認められない。ところが15世紀半ばの天順5年（1461）、許彬という人物が泰山に登った際、弘治『泰安志』巻6「重修玉女祠記」に

〔天順5年、許彬は〕山東監察御史康驥、按察使王鉞にしたがい、一緒に〔泰山に〕登り、泰山天仙玉女碧霞元君という神を見た。衣冠像設は儼然として、生気が降臨していた。霊風颯然とし、心より甚だ之を敬畏した。

とあるが如く、頂上で昭真観の玉女が「泰山天仙玉女碧霞元君之神」という名で祀られているのを目にしている。これが碧霞元君の名が文献上に現れる最初の事例である[5]。

2　信仰の定着と拡大

(1) 明代の泰山における信仰の定着

成化15年（1479）、明朝が経費を負担し、碧霞元君を祀る廟（昭真観）の大規模な修復が行われた。弘治16年（1503）には皇帝（弘治帝）が宦官を派遣して碧霞元君に病気平癒を祈願させており、皇帝も碧霞元君を信仰するようになったことが知られる。また弘治『泰安志』巻1「祠廟」に

元朝はもとの祠（廟）を改築して昭真観を建てた。洪武年間（1368～98）の初めに重建した。成化17年に復た修復した。19年に碧霞霊応宮の名額を賜った。

とある通り、明朝は成化19年、昭真観に対し、新たに「碧霞霊応宮」との名称を賜与しており、これによって碧霞元君の名が定着した。以上のように成化～弘治年間（1465～1505）は、碧霞元君が明朝の保護を受け、その信仰の対象になるとともに、碧霞元君の名称が定着した重要な時期であり、巡礼者もこの時期に増加したと見られる。香税（入山料）の徴収が事実上始まったと考えられているのもこの時期である。

正徳年間（1506～21）になると巡礼者はさらに増え続け、皇帝が碧霞元君を祀る使者を派遣することも当たり前となり、嘉靖～万暦年間（1522～1620）には、碧霞元君の名は文献に定着し、年間数十万人の巡礼者が泰山へ押し寄せるようになった。また皇太后が皇帝（万暦帝）に子が授かるよう使者を派遣して碧霞元君に祈願させたり、宰相の張居正が息子を遣わして病気平癒を祈願させたりしており、皇室や権力者が引き続き碧霞元君を信仰していたことが知られる。一方、東岳大帝に対する信仰は廃れていき、明末になると、泰山の頂上にある大帝廟は寂れて参拝する者もなく、その建物は損壊していたといわれている。

(2) 碧霞元君廟の設置

このように明朝が碧霞元君を信仰・保護するようになると、民間でも碧霞元君に対する信仰が広まり、民衆は泰山へ盛んに巡礼に赴くようになった。また各地の東岳大帝廟にも碧霞元君が合祀され、東岳大帝よりも信仰を集めるようになった。さらに嘉靖～万暦年間には碧霞元君廟が各地に次々と建てられ、地域の信仰の核となった。泰山のある山東省では、各県に最低一つは碧霞元君廟が建てられたといい、廟は華北から江南へ広まっていった。

廟では碧霞元君の誕生日である4月18日に盛大な廟会（お祝いの行事）が行われ、多数の男女が参拝に訪れた。例えば都の北京には二十数ヶ所も碧霞元君廟があり、中でも五ヶ所（麦荘橋の北、草橋、東直門・安定門の外、弘仁橋の東）の廟（＝五頂、頂というのは各々の廟が泰山の山頂にあると想定されたため）、とりわけ弘仁橋の廟が有名であった。弘仁廟では誕生日が近づくと、参拝者は香首（香会のリーダー）に率いられ、輿や馬に乗り、或いは徒歩で、碧霞元君を載せた御輿とともに、旗を掲げ鐘や太鼓を打ち鳴らしながらやって来たという。明末の参拝の様子が劉侗・于奕正『帝京景物略』巻3「弘仁橋」に以下の如く見え

ている。

4月18日は元君の誕生日であり、都の士女が進香する。香首は期に先んじ、鐘を鳴らし衆に号令し、衆はこれにしたがうこと師の如く、長令の如く、諸父兄の如くである。月の1日より18日に至り、…輿で来る者、騎馬に乗って来る者、徒歩で来る者、歩きながら拝む者、旗を立て金鼓を鳴らす者がいる。輿で来る者は貴家豪右の家の者である。騎馬に乗って来る者は游侠児や小家の婦女である。徒歩で来るのは貧民の子の酬願（お礼参り）・祈願する者である。参拝する者は元君の像を頂き、紙幣を背負い、歩みて1拝すれば3日にして至る。…5歩・10歩・20歩毎に1拝する者は1日にして至る。…〔参拝者は〕首に金の字の〔記された〕小牌（札）を掛け、肩に令の字の〔記された〕小旗を立て、木製の小宮殿を舁き、元君駕（碧霞元君の像を載せた御輿）という。…御輿の後ろには高さ2丈の黒い旗を立て、七星を点じ(北斗七星を描く？)、御輿の前には3丈の刺繍のある旗を立て、元君の号を縫い付けている。

なお参拝者が紙幣を背負っていたというのは、賽銭に用いるためであろう。また参拝者は碧霞元君を載せた御輿を担いでいたことが知られ、興味深い。

明代末期には、碧霞元君は子授け・眼病治癒に功徳のある神から、より広範な職能を持つ万能神へと変化し、人々は子授け・眼病治癒に加え、眼病以外の様々な病気の平癒・結婚の良縁・科挙合格・官僚としての出世・豊作・裁判の勝訴等、様々な祈願をするようになった。

(3) 清朝の碧霞元君信仰

泰山の碧霞元君に対する巡礼は、明末～清初の戦乱によって衰退したが、政情が安定してくると、清朝は碧霞元君信仰を民心の収攬に利用しようとした。具体的には順治帝～乾隆帝の時代（1643～1796)、勅命により度々碧霞元君の廟を改修した。また乾隆帝は即位後、200年以上にわたって徴収され続けてきた香税を廃止しただけでなく、自ら6回も泰山に登り、元君廟に参拝した。さらに碧霞元君を祀典（国家が公認した神のリスト）に載せられた「正祀」と同格の扱いとすることを宣言している。このような清朝の態度により、泰山への巡礼は再び盛んになった。清代では康熙帝～乾隆帝の時代（1661～1796)、及び光緒帝の時代（1875～1908）が巡礼の二大高潮期である。

三　泰山巡礼

上述の通り、明代後半には碧霞元君の廟に参拝するため、多数の人々が泰山へ巡礼に訪れるようになり、その数は年間数十万人規模に達したともいわれている。明清時代における巡礼の様子は、実録・地方志等の政府が編纂した史料、文人の随筆、白話小説等に見えており、また近年、題記や香社碑（巡礼者が巡礼に来た証として、泰山の参道や周辺の寺院等の石碑・壁に自らの名前等を刻ませたもの）等の石刻史料もその全貌の解明が進み、巡礼研究に用いられるようになっている。ここではそれらの史料を用いた研究[(6)]を紹介しつつ、明清時代における巡礼の様子をうかがってみたい。なお石刻史料について付言すると、今回の報告で参照したのは、泰山西北の霊巌寺に残されている題記に関する研究である[(7)]。霊巌寺には400を超える題記が残っており、万暦35年（1607）以降巡礼に訪れた6000人以上の人々の名が刻まれているという。

1　巡礼者の人数

碧霞元君の廟に参拝する巡礼者は、弘治年間（1488～1505）にはかなりの数になっていたと見られ、それは廟の修復が巡礼者の布施や賽銭によって行われていることからうがえる。碧霞元君の名が定着する16世紀半ば～後半には、巡礼者の数は年に「数十万人を下らず」であったといい、80万人という数字も史料には残っている。ところが17世紀に入ると、巡礼者の数は減少した。その原因として泰山一帯が水害に見舞われ、参道が崩れてしまったこと、山東・華北一帯が饑饉に見舞われたこと、白蓮教の乱・李自成の乱をはじめとする民衆反乱に加えて、清軍の侵攻もあり、華北が戦乱に見舞われ続けたこと等が挙げられる。

なお白蓮教等の宗教結社の教徒が泰山巡礼に赴くことがあったと見られる。例えば天啓2年（1621）5月、徐鴻儒に率いられた白蓮教徒が山東で蜂起し、山東・河北・河南一帯を荒らし回ったが、史料を見ると、その前年に泰山への巡礼者が急増している。これはこの時、既に山東に白蓮教徒が集結し、活動を活発化させており、彼らが泰山へ巡礼に赴いたためと考えられる。

清代に入っても、戦乱や軍事費等を捻出するため香税の額がつり上げられたこと等により、巡礼者の数は少なく、年間数万人規模であったといわれる。ところが清朝が碧霞元君を保護・優遇する態度を打ち出し、香税を廃止する等したため、巡礼者は康熙年間（1662～1722）以降増加し、乾隆年間（1736～95）初めには年間数十万人と称されるまでになった。

2　巡礼の時期及び出発地

1年のうち、巡礼者が多かったのは上季（正月～4月）であり、特に4月18日は碧霞元君の誕生日とされたことから、多くの巡礼者が参拝に訪れた。1日の参拝者は3000人～1万人、多い時には2万人にも及んだという。また作物の収穫を終えた下季（9月～12月）にも、「秋香」と呼ばれる巡礼が行われていた。中季（5～8月）に巡礼に訪れる者は少なかった。

題記には巡礼者の本籍地・現住地が記されており、巡礼者がどのような地域から巡礼に来ていたのかが具体的に明らかになる。題記に見える出発地を整理すると、山東省が圧倒的に多く、半数を超えている。次いで河南省東部・河北省南部が多く、安徽省・江蘇省の北部、浙江省の地名も散見される。他に陝西省・四川省からも巡礼に来ていたことを示す史料が検索される。出発地についてさらに詳しく検討すると、大運河・黄河等の主要な交通路に沿った地域に集中していることが知られる。これは交通の便が良いだけでなく、その一帯の経済が発達しており、住民が比較的裕福であったことも一因と考えられる。

また題記所載の出発地の半数以上に農村の地分を示す語（村・庄・郷・保・里等）が見られ、巡礼者の多くが農村に住んでいたことをうかがわせる。巡礼者が県城の内部や郊外等に住んでいたことを示す題記、複数の農村に住んでいる者、都市・農村に住んでいる者が一緒に巡礼に赴いたことを伝える題記も見られる。

3　香会の構成

巡礼者の多くは、香会・香社等と呼ばれる任意の団体を組織していた。香会では構成員から資金を徴収し、巡礼の原資に充てるという、講のようなことが行われていた。香会の人数は、大きいものでは100人を超えるが、半数以上は10～20人であり、30人未満の会が80%以上を占めている。また役職として、リーダーである会首（香頭・香首・社首・香長・首人等とも称される）の他に、副会首・駕主（駕籠を管理）・収頭（会計係り）・管事人（庶務係り）・蠟主（奉納する蠟燭を担当）・馬士（乗馬を管理）等の名が見えている。なお一般の参加者は信士・信女・会衆・弟子・善人等と呼ばれた。因みに題記には僧侶や道士の名も見えているが、彼らが会首や役職についている事例はない。

題記の中には女性の名前も見えている。題記では、女性は通常実家の姓を取って「○○氏」、嫁ぎ先と実家の姓を併せて「張李氏」「張門李氏」等と記されるが、男性の姓もしくは姓名の下・横に「妻○○」「母○○」等と記されることも多い。また題記に見える香会の中には女性の数が50人を超えているものがあり（全85人中）、全てが女性のもの（全36人中36人）、また女性が会首をつとめているものもある。題記中の女性数は全体の1割強であり、現在の泰山巡礼では女性が大半を占めているので、それとは異なるが、巡礼に来ていたのに題記を残さないケースもあったであろうから、実際には女性の割合はもっと高かったと推測される。なお女性のみによって組織された巡礼があったことは、例えば明代の有名な白話小説である西周生『醒世因縁伝』第68回・第69回にも見えている。素姐という裕福な未亡人が老候・老張という二人の女道士に騙され、女性だけの泰山巡礼に連れ出され、金をだまし取られるという話である。

香会については、白蓮教徒が泰山巡礼に赴くのを抑止するため、その人数を制限するよう措置がなされた事例もある。『明世宗実録』巻340、嘉靖27年（1548）9月乙酉条が載せる、刑部尚書喩茂堅等の上奏に

> 一、妖妄を禁ず。白蓮教の余党が山東・河南北・直隷の徐鳳の間に散処している。……宜しく法を設けて泰山に進香する者を禁止し、聚まって20人以上にならないようにすべきである。

とあるのがそれである。

4　巡礼の様子

明清時代の泰山への巡礼は、およそ以下のように行われていた。まず巡礼者は資金が集まると、地元の碧霞元君の廟に参拝し、泰山へ巡礼に赴くことを報告する。次いでその廟に祀られている碧霞元君を載せた御

輿を担ぎ、街中を練り歩き、巡礼に出発することを周囲の人々に知らせる。出発してからは黄色の三角旗を掲げ、銅鑼を打ち鳴らしながら進む。途上に碧霞元君廟があればそこにも参拝し、宿泊する際には碧霞元君の神像を安置し、祭礼を行った。巡礼者は碧霞元君廟に宿泊することが多かったようである。

巡礼者が泰山のふもとの泰安に到着すると、会首なじみの宿屋（客店）に宿泊する。泰安には巡礼者を宿泊させる客店が多数設けられ、また宿泊を斡旋する業者（牙家）も多数存在した。巡礼者は客店内に設けられた碧霞元君の廟に焼香した後、岱廟へ赴き香税納入の手続きをすませると、いよいよ泰山に登り、碧霞元君の廟に参拝することになる。明末に泰山に登った張岱は、『瑯嬛文集』巻2「岱志」において、客店の様子を次のように記している。

〔泰安の〕州城から数里離れたところまで牙家が迎えに来て、馬を引いて宿屋の門まで連れて行く。門前には厩・遊郭・芸人のいる部屋が10数間ある。…税房にも、駕籠を募るのにも、香税を納めるにもしきたりがある。客は上中下の三等に分かれ…客のリストには数千人が載り、部屋数、葷素の酒宴や芸人・使い走りの者はいずれも100を越え、牙家も10姓を越えている。入山する者は1日に合計8000～9000人、春の初めには2万人に及ぶ。

巡礼者が泰山を登り、頂上で碧霞元君廟に参拝する状況については、「岱志」に以下の如くある。

巡礼者は五鼓（午前4時頃）に起床し、暗いうちに宿屋を出発する。銅鑼に合わせて阿弥陀仏の名を唱和し、松明は40里にも連なり、星の海を注いだようであり、数石の蛍を山谷の間に放ったようである。…頂上に着き、1里ばかり歩くと村落があり…碧霞元君の廟の門となる。10数人に担がれ、他の香客を振り払って進むと、碧霞元君の像は鉄柵に囲まれ、三尺に及ばないほどで、あまり大きくない。…子授けを祈願して子が生まれた者は、銀でかたどった子どもの人形を、眼病の平癒を祈願して光明を得た者は、やはり銀でかたどった眼の模型を奉納して功徳に酬いる。大きな金銭が前方に掛かっており、巡礼者はそれを目がけて銀や銭を柵の中に投げ入れ、金銭に当たれば福があるとされる。奉納された財貨は積み重なって高さは数尺を満たすほどで、泰山のふもとには兵舎があり、毎夜そこの兵士が警護に当たっている。季節毎に官が掃殿（賽銭・お布施をかき集める、後述）すると、〔財貨は〕数万金にも登る。

巡礼者は未明に客店を出発し、険しい山道を松明の火を掲げ、阿弥陀仏の名号を唱え、鐘を打ち鳴らしながら登っていき、山頂に着くと碧霞元君の廟に詣で、賽銭を奉納したのである。賽銭の他に、子授けを祈願してかなえられた者は子どもの人形、眼疾の平癒を祈願してかなえられた者は眼の模型を奉納したこと、賽銭が巨額であったこと等も知られる。なお上引史料には記されていないが、山頂の廟には「碧霞元君璽」があり、それを押した紙は魔除けのお札になると信じられていたため、巡礼者は高額の代金を払って押印してもらったという。また巡礼者は下山すると客店で祝宴を開き、帰郷してからは地元の碧霞元君の廟に無事帰還できた旨を報告した。

因みに巡礼者の祈願の内容を具体的に記している題記があり、それを見るとやはり子授けを祈願したものが多いという。また「二次進香」・「三次建醮」等と記されている題記があるが、これは泰山に複数回巡礼に来ていたことを示すと理解される。中国では聖地に3年連続で巡礼することはしばしば行われ、途中でやめると不利益があると信じられていた。「二山進香」・「三山進香」と記される題記もあり、これは泰山の他、明清時代に聖地とされた普陀山・武当山等の巡礼を指すのではないかと考えられる。

四　香税の徴収

1　香税

香税（正式名称は入山報名香税銀）とは寺廟等において、巡礼に訪れた人々から入山料・参拝料として徴収する特殊な税を指す[(8)]。泰山では明清時代、200年以上にわたって香税の徴収が続けられた。香税の徴収は正徳11年（1516）から開始されたというのが通説であったが、最近の研究ではそれよりも早い時期に徴収が始まっていた（ただし具体的な開始時期は明らかにならない）と考えられている。いずれにせよ、泰山を訪れる巡礼者の増加が徴収開始の背景にあった。

香税の納入は、巡礼者が宿泊する客店の仲介によって行われた。即ち客店の主人が巡礼者に付き添って泰山の麓にある岱廟（泰山の神々を祀る有名な廟、封禅がここで行われた）に設けられた役所へ行き、そこで巡礼者の姓名を告げて税を納め、引き換えに登山の単（許可証）の発給を受けた。香税は1名毎に銀で徴収

され、税額は、山東省から来た巡礼者は5分4釐、外省から来た巡礼者は9分4釐とされたが、万暦8年（1580）、一律8分に改められた。これらの点について、張岱の『岱史』巻13「香税志・香税銀例」には

> 旧例では、〔香税の税額は〕本省（山東省）の巡礼者は1人5分4釐、外省から来た巡礼者は1人9分4釐であり、客店の主人と巡礼者がともに遥参亭（岱廟のところにある、役所のある場所）に赴き、〔香客の〕氏名を報じ、銀を納めて単を領し、山頂に上ることとされていた。〔ところが〕外省からきた巡礼者の中に、山東省から来たと偽って税を少なく納めようとする者が出てきた。そこで改めて議し、万暦8年より本省・外省の巡礼者を分かたず、一律に銀8分〔を課すこと〕とした。

と見えている。この後、巡礼者が減少する中で、税収を維持するため、税額は万暦34年に1銭2分とされた。清代初期にかけては、軍事費の捻出を目的として税額はさらにつり上げられ、3銭3分～5銭にまで達したが、戦乱の終息に伴い引き下げられ、2銭となった。因みに1両＝10銭＝100分＝1000釐である。

香税の税収は、万暦年間（1573～1620）初めは約5万両であったが、4万～2万両と減少し、万暦年間末には6000～1万両にまで落ち込んだ。これは動乱により巡礼者の数が減り、税額をつり上げても減収を阻止できなかったためである。清代に入ると18世紀前半に1万両前後との数字が残っている。なお税収のうち、半分～三分の一程度は中央へ送られ、残りは存留され、廟の修復費の他、藩王や布政司・泰安州等の地方政庁の経費とされ、官員や兵士の俸給・土木建設・賑恤等に充てることとされた。しかし現実にはそのほとんどが中央・地方の政府関係経費に用いられてしまい、廟の修復等に用いられる分は少なかった。

また明末～清初にかけて、巡礼者が減少したにもかかわらず、税収を維持・増大させようと税額がつり上げられ、しかも徴収の課額（ノルマ額）を充たすため、官員は客店に納税額を強制的に割り当て、巡礼者が宿泊するしないにかかわらず、強引に税を徴収しようとした。そのため店戸の主人の中には割り当て分を納入できず、投獄されたり、逃亡・自殺したりする者が続出した。そこで乾隆帝即位直後の雍正13年（1735）、積年の悪政を是正し、新帝の善政をアピールするため、香税は廃止された。

2　混施

泰山では巡礼者がいわば賽銭・お布施として金銀等の財貨を廟に奉納したり、玉女池に投じるという風習があり、宋代の頃より年に数回、そうした財貨を集め、廟の修復費用等に充てるということが行われていた。集められた財貨は混施、混施を集める作業は掃殿と称された。明代に入ると、成化3年（1467）以後、官員が自ら掃殿するとともに、混施は香税とともに官庫へ入れられるようになり、廟の修復の他、中央・地方の政府に関わる様々な経費に用いられ、混施香銭と称された。掃殿・混施香銭の徴収は、香税の徴収がやめられた後も続けられた。

おわりに—今後の課題

1　東岳大帝・碧霞元君をめぐって

以上に述べた如く、明代後半になると、泰山において碧霞元君に対する信仰が定着し、民間にも広まっていた。しかし碧霞元君に対する巡礼が盛んになる以前、即ち明代以前の泰山への、即ち東岳大帝に対する巡礼がどのようであったのかについては、史料の不足もあり、十分明らかになっていない。

碧霞元君に関しては、①なぜ明代中期以降、唐突と云っても過言ではない形で、官民双方によって盛んに信仰されるようになり、毎年数十万人もの巡礼者が泰山を訪れるまでになったのか（当時碧霞元君は明朝の祠典に載せられた、明朝公認の神ではなかった＝「淫祀」であったにもかかわらず）、②そもそも碧霞元君という女性神は何時頃からどのように出現するのか、等の課題に対し、明朝の宗教政策、民間信仰、交通・経済の発達等を視野に含めながら、今後より実証的に検討を進める必要がある。

因みに碧霞元君信仰の起源に関して、例えば宋・金・元朝が玉女を信仰するのを見た道教勢力が、元代末期に玉女を道教の神々の体系に組み込み、さらに明代に入り、玉女に封号を下賜するよう明朝にはたらきかけ、かくて玉女は碧霞元君という封号を与えられた。この後、碧霞元君は無生老母（中国の民間宗教における万物の創造神）の弟子として宝巻（仏教・道教や民間信仰の教えを説いた書物、講説・曲詞・韻文からなり、木魚等の伴奏入りで読み上げられる。明清時代には布教活動に盛んに用いられた）に載せられ、民間にも広まった、とする説がある[(9)]。しかし封号の下賜を道教勢力が明朝にはたらきかけた点等、実証的に不

十分な部分がある。

2　巡礼をめぐって

今後、泰山巡礼と普陀山・武当山に対する巡礼、杭州の観音巡礼、福建や台湾の媽祖巡礼、四国遍路、イスラム巡礼、サンティアゴ巡礼等との比較を試みる必要がある。愛媛大学法文学部附属　四国遍路・世界の巡礼研究センターのセンター長である寺内浩氏は、比較のための指標として以下の6点を設定しておられる[(10)]。それらについて、泰山巡礼に関して現在明らかになっている点、今後の見通し・問題点等を挙げれば以下の通りである。

①往復型の巡礼か、回遊型の巡礼か→泰山巡礼は往復型の巡礼と言い得るが、巡礼者は途中で碧霞元君廟にも参拝しており、回遊型の要素もあるのではないか。

②聖地と聖遺物・聖人→泰山巡礼において、聖遺物・聖人に対する参拝という要素は管見の限り存在しない。

③巡礼者の信仰→泰山への巡礼者の根底には、地域の廟を核とする碧霞元君信仰（またはそれに仮託した民間信仰）があった。

④病人・貧民の巡礼者→碧霞元君は眼病に御利益のある神様であるため、目の不自由な巡礼者のいた可能性がある。貧民については具体的にどの程度の者を指すのか、また⑤のサービスとも関わるが、管見の限り巡礼者はそれなりに経済力のある（自活できる）人々であったように思われる。

⑤巡礼者への慈善活動→泰山へ向かう途中にある碧霞元君廟が宿泊・食事等のサービス提供を担当していた形跡がある。廟のそうした活動の実態やネットワーク等について、今後検討を行う必要がある。

⑥世俗・宗教権力との関わり→泰山巡礼の主体は民衆であり、特定の仏教や道教の宗派・勢力が巡礼に直接関与（例えば支援・保護・統制等）した形跡は見られないようである。世俗（政治）権力（王朝、中央・地方政府）は巡礼者が白蓮教等の宗教結社の信徒と結託している場合、統制・弾圧した（巡礼の人数を制限する等）。また巡礼者から香税を徴収している。一方、王朝が碧霞元君を信仰する一環として、泰山の廟や巡礼に利用される参道を修復したという事例はある。そもそも碧霞元君の信仰が民間に広まり、泰山への巡礼が活発化したのは、王朝が碧霞元君に対する信仰・保護を明確に打ち出してからであり、その意味では王朝が巡礼を間接的に奨励したということになるのではないか。

如上の点以外にも課題を挙げるとすれば、例えば巡礼をめぐる史料について、白話小説の中に、巡礼の実態を伝える史料で未発掘のものがあるのではないかと推察される。石刻史料も『泰山石刻』（中華書局、2007年）が出版される等、近年その全貌が明らかになってきているが、本格的な検討を加えるのはこれからであり、検討を通じて、文人や士大夫が描く、いささかステレオタイプな巡礼とは別の側面を明らかにすることが期待される。また香会が組織される際には、地域社会のネットワークが基盤になったと考えられる。そうしたネットワークの実態についても解明が求められよう。

註

(1) 泰山信仰・東岳大帝についての概観は、主として〔澤田・窪 1982〕・〔Chavannes1941〕・〔Dott2004〕等による。

(2) 宋代の泰山への巡礼については〔劉・陶 2004〕・〔方 2016〕等において検討がなされている。

(3) 以下、碧霞元君の登場、信仰の定着と拡大に関する記述は、主として〔澤田・窪 1982〕・〔石野 2010〕・〔呂 1994〕・〔葉 2007・2009a・2009b〕・〔Chavannes1941〕・〔Pomeranz1997〕・〔Dott2004〕等による。

(4) 例えば〔石野 2010〕・〔葉 2007〕。

(5) 碧霞元君の起源に関しては、泰山の玉女＝東岳大帝の娘であるという説の他に、黄帝の娘・西岳華山の玉女（仙女）・庶民の女性（石守道（敢当）なる人物の娘）・観音菩薩・媽祖等の諸説がある（〔平木 1982〕・〔羅 1927〕）。

(6) 以下、泰山巡礼に関する記述は、主として〔澤田・窪 1982〕・〔二ノ宮 2009〕・〔石野 2011〕・〔呉・蕭 1989〕・〔葉 2009a〕・〔呂 1994〕・〔Chavannes1941〕・〔Glen1992〕・〔Dott2004〕等による。

(7) 石刻史料に関する研究は、特に〔石野 2011・2017〕・〔葉 2009a〕を参照した。

(8) 以下、香税・混施については〔澤田 1982〕・〔蔡 2011〕・〔邱 2014〕等による。

(9) この説は〔葉 2007〕に見えている。

(10) 平成30年度科学研究費研究計画調書（種目：基盤研究（B）、研究代表者：寺内浩、研究課題名：四国遍路と世界

の巡礼の比較歴史学研究、研究期間：平成 30 ～ 34 年度)。

参考文献

石野一晴　2010　「泰山娘娘の登場ー碧霞元君信仰の源流と明代における展開ー」『史林』93ー4
石野一晴　2011　「17世紀における泰山巡礼と香社・香会ー霊巌寺大雄宝殿に残る題記をめぐってー」『東方学報』京都86
石野一晴　2017　「泰山山麓題記調査報告」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』3
石野一晴　2017　「「近世」中国と巡礼」『歴史と地理　世界史の研究』251
鵜殿正元　1958　「泰山府君の信仰 」『明治大学人文科学研究所紀要』11
小南一郎　2003　「女神の目覚めー碧霞元君と春の祀りー」『説話論集』13
澤田瑞穂　1982　「泰山香税考」『中国の民間信仰』工作舎
澤田瑞穂・窪徳忠　1982　『中国の泰山』講談社
平木康平　1982　「娘娘神成立考ー中国母神の研究（1）ー」『東方宗教』60
二ノ宮聡　2009　「『醒世姻縁伝』に見られる碧霞元君信仰の形態ー泰山信仰の変遷と東伝へー」『アジア文化交流研究』4
野口鐵郎他　1994　『道教事典』平河出版社
松田佳代　2001　「日本における泰山府君信仰」『伝承文化研究』1
邱仲麟　2014　「明清泰山香税新考」『台大歴史学報』53
呉廷文・蕭宝方　1989　「張大山香客店」『民俗研究』1989年4期
蔡泰彬　2011　「泰山与太和山的香税徴収・管理運用」『台大文史哲学報』74期
周郢　2008　「東岳廟在全国伝播与分布」『泰山学院学報』30巻2期
方玲　2016　「北宋東岳廟祀の伝播ー山西定襄東岳廟碑初探ー」二ノ宮聡訳、土屋昌明他編『道教の聖地と地方神』東方書店
葉濤　2007　「論碧霞元君的起源」『民俗研究』2007年3期
葉濤　2009a　『泰山香社研究』上海古籍出版社
葉濤　2009b　「碧霞元君信仰与華北郷村社会：明清時期泰山香社考論」『文史哲』2009年2期
羅香林　1927　「碧霞元君」『民俗』69・70
劉慧・陶莉　2004　「関於宋代的泰山香客」『民俗研究』2004年1期
呂継祥　1994　『泰山娘娘信仰』北京学苑出版
Chavannes, Edouard. 1941 *Le T'ai Chan : Essai de monographie d'un culte Chinois,* Paris (菊池章太訳　2001 『泰山―中國人の信仰』勉誠出版)
Dott, Brian Russell. 2004 *Identity Reflections : Pilgrimages to Mount Tai in Late Imper ial China,* Cambridge and London : Harvard UniversityAsia Center.
Dudbridge, Glen. 1992 "Wumen Pilgrims toT'aishan" Susan Naquin and Chun-fang Yu eds, *Pilgrims and Sacred Sites in China,* University of California Press, pp. 39-64.
Pei-Yi Wu. 1992 "AnAmbivalent Pilgrim toT'aishan" Susan Naquin and Chun-fang Yu eds, *Pilgrims and Sacred Sites in China,* University of California Press, pp. 65-88.
Pomeranz, Kenneth. 1997 "Power,Gender,and Pluralism in the Cult of the Goddess of Taishan"Theodore Huters, R.Bin Wong, and and Pauline Yu eds. *Culture and State in Chinese History,* Stanford : Stanford University Press, pp.182-204.